

帰郷

2005(平成17)年5月17日鑑賞(東宝東和試写室)

☆☆☆



監督・脚本＝萩生田宏治／出演＝西島秀俊／片岡礼子／守山玲愛／高橋長英／相築あきこ／光石研／吉行和子（ビタース・エンド配給／2004年日本映画／82分）

……母親の再婚。帰郷した晴男は、思いもかけず8年ぶりに昔の恋人深雪と再会した。今はシングルマザーとなっている彼女の7歳の子供チハルをめぐって、3日間にわたって展開される静かな大騒動……？ 人間のそして男女の心の結びつきをテーマに描かれる心暖まる佳作が今誕生した！

第3章

故郷には初恋の味が……

『帰郷』とは、故郷に帰ること。故郷から都会の大学に進み、その大学を卒業した男にとってはその後、都会に残って就職するかそれとも故郷に戻るかは大きな人生の選択。そこで故郷を離れる決心をした男は、新たな就職先がメインとなるため、帰郷するのは何かのイベント(?)がある時に限られるもの。しかし、男なら誰でも故郷には初恋の人や恋人の1人や2人(?)いるのは当然……？

他方、大学卒業後8年も経てば、おおむね人それぞれの人生の形が定まっているもの。この映画で2人の主人公の引き立て役となるナオミ（相築あきこ）と山岡（光石研）は、故郷で安定した生活を営んでいた。しかし、主人公晴男（西島秀俊）は東京の会社に就職したものの未だ独身。そして帰郷の際、全く思いがけずに出会ったかつての恋人深雪（片岡礼子）はシングルマザーとして山岡の店でアルバイトをしていた。こりゃ、何かがおこらないはずがない……？

微妙な母子の心の動きも……

映画は、東京で1人暮らしをしている晴男がアパートに帰り、1枚のハガキを目にしたところからスタートする。そこには故郷にいる母親から「再婚すること

になりました。結婚式には是非帰ってきておくれ」と書いてあった。何だこりゃ……？ びっくりしながら帰郷した晴男に対して母親（吉行和子）はいとも単純に再婚できることを喜び、「お前も早く身を固めて孫の顔を見せておくれ……」ときた。父親を亡くし、母親の手ひとつで育てられた晴男は「将来は母親を東京に呼んで……」などと考えながら、今は1人東京で暮らしていたが、何のことはない母親の「生命力」や「活動力」の方が圧倒的に上だった！

将来の不安や息子に迷惑をかけられないからという「マイナス要因」からの再婚ではなく、「もともと年下の男と生活したかったのよ」などとあっけらかんとノロケ、「そりゃ好きだから再婚するんだよ」と断言する母親の姿に晴男も一安心。

ところがその晩、友人のナオミ、山岡と飲んだ晴男は、今夜が「新婚初夜」となる母親の家に戻るわけにもいかない。さてそうなる……？

思わずドッキリ！ こんなセリフ

この映画の面白さや狙いのうまさは、シングルマザーの深雪が晴男に対して、7歳の娘チハル（守山玲愛）について説明する時の、「名前はチハルっていうの。晴男くんのハル」と「目なんかそっくりよ」という2つのセリフ。8年ぶりに再会したかつての恋人で、今はシングルマザーとなっている深雪からそんなことを言われたら、男なら誰でも思わずドッキリ！ そのうえ、この映画が面白いのは、あくまで明るく前向きな(?)晴男の母親が、家に連れてきたチハルを見てノーテンキに「目のあたり、あんたに似ているわね」などと言うところ。こりゃ一体何だ……？ ひょっとしてチハルは晴男の……と観客は誰もが考えてしまうし、身に覚えのある(?)、そして根が真面目な(?)晴男は次第に……？

深雪は魅力的だが……？

私は深雪を演じる片岡礼子をこの映画ではじめて観た。パンフレットによれば私の故郷愛媛県出身の女優で順風満帆のスタートだったが、2002年1月に脳出血で倒れ、2年間の闘病生活を経てこの映画で復帰したとのこと。1971年生まれだから今34歳。ちょうどこの映画の深雪と同じような年齢だし、私の見立て(?)ではかなりの美形。そしていかにも不思議なキャラの女性深雪像を見事に演じて

いる。

主人公の晴男は真面目一辺倒のカタブツ男(?)だが、この映画で見せる深雪の人物像(女性像)はかなり複雑。つまり魅力的な女性だが、ちょっとヤバそうな面も……。その第1はあのドッキリ発言! そしてその上をいくのは、「明日、家に訪ねてきて。チハルの顔を見せたいから。絶対よ……」と言って晴男と別れたこと。こりゃ単になつかしいだけなのか、それとも何かのたくらみがあるのか……。この映画のエッセンスはそこからのストーリーにつままっているので、十分に味わってもらいたいが、私としてはそれと同時に深雪の人物像(女性像)の分析も是非……。

子役の演技力にビックリ!

7歳のチハルを演ずるのは同じ7歳の守山玲愛。この映画では母親の深雪は晴男との「導入部」と「まとめの部分」だけの登場で、メインとなる晴男との絡み(?)は、ほとんど7歳のチハルの役目。アパートを訪ねてきた晴男をはじめて見た時の不審そうな目や、「お母さんはいますか」の問いに対して「いません」とぶっきらぼうに答える演技を見ただけでも、「これは……」と思ってしまう。そして映画の中盤は、ほとんど晴男とチハルの2人舞台だが、2人の登場だけでスクリーンに十分な緊張感を維持させる力量にはビックリ。果たしてこのチハルは晴男の子……。それとも……?

状況設定は中国映画『故郷の香り』と同じ!

大学卒業後、主人公の男性がふとしたことで故郷へ戻り、そこでハプニング的にかつての恋人と出会うというパターンは、非常に想定しやすいものだし、多くの人たちの共感を得ることができる設定。この映画は「8年後」だが、私が今年3月12日に観た中国映画『故郷の香り』(03年)は「10年後」の物語。

この『故郷の香り』で描かれるのも、主人公の男性が帰郷している数日の間に展開されるかつての恋人との物語だが、再び故郷を離れるまでの時間は非常に密度の濃いもの。静かな音楽をバックに展開される『故郷の香り』の「10年後の物語」とこの『帰郷』の「8年後の物語」は、その内容は全く違うものだが、人間

のそして男と女の心の結びつきという本質は全く同じ。

美しい佳作の誕生に拍手！

この映画の萩生田宏治監督はこれが第3作目とのことだが、パンフレットの冒頭には、監督自身のこの映画についての思いが短く綴られている。この『帰郷』という映画のテーマが構想されるについてはきっと監督自身の何らかの体験も含まれているとは思っているが、それはもちろん映画上には表現されていない。あくまでこの映画で表現しようとしたのは、晴男と深雪そしてその娘のチハルとの心の交流を通しての人間のそして男と女のあり方ということだ。

この映画の製作費がいくらかったのかは知らないが、きっと低予算で完成しているはず。大規模なセットのために何億円もかけてリアリズムあふれる映像を提供し、それによる臨場感や緊張感を売りモノにするのもいいが、たまにはこんな何のお金もかけないで(?) 普通に見慣れた風景の中で展開される普通の人間の心のドラマを鑑賞するのもいいものだ。82分という短い時間の中で静かに展開される故郷での大騒動(?) は見ごたえ十分。美しい日本映画の佳作の誕生に拍手！

2005(平成17)年5月18日記

ミニコラム

男だけの同窓会はイマイチ……？

「同窓会」。この言葉を聞いただけでも懐かしいあの顔この顔が浮かんでこようというもの。しかし映画や小説になるのは、そこであの彼氏この彼女と再会するからだ。高校時代は遠くから見ただけで声もかけることができなかったマドンナが、今は離婚して1人でいたらあなたは どうする……？ ところが私の中学・高校は6年制一貫教育の男子校だから、当然同窓会への出席

は男ばかり。したがってそこでは仕事の話の他は、ハゲと白髪の比較そして腹の出っ張り具合……？ こりゃ色気のないことおびただしい限り。もともと、わが母校愛光学園も創立50周年を迎えた2002年を期して男女共学へと一大方向転換をしたから、十数年後の同窓会ではちょっと危険なムードが漂っているかも……？

2005(平成17)年10月18日記